



旧公会堂の見取り図

1 町の模様

一、ホロンピアまでの三輪（昭和40年～63年）

公会堂を改築し三輪会館に

旧公会堂は木造寄せ棟づくりの平屋建てで二部屋ありました。玄関側は板の間、奥の間は畳敷きで、戦前は正面中央に大正天皇、皇后陛下のご真影が奉安され、右側は床の間、左は縁側になっていました。部屋はどちらも約二十畳ほどでした。区の集会があると仕切のふすまを取り払って使い、祭りのときには板の間で獅子舞の稽古、畳の間では水引幕を広げたりしていました。

また、公会堂の南側に木造平屋建ての消防器具庫があり、正面の右側は畳の間で、左側には昔は竜吐ポンプが置かれていました。建物の奥には炊き出しもできる大きなカマドが三つありました。公会堂の北側と西側に民家がありました。

三輪区では、三十九年十二月に公会堂をこれまでよりも一層、区民に親しまれる場とするため、三輪区と三輪財産区が協議して改築が検討されました。まず三輪区から五人、財産区から五人計十人の建築委員を選出し、どのような施設にするか検討が重ねられました。



社務所と三輪会館の間には民家が

保しました。その後、隣接していた民家と裏の民家を買収して、来館する人たちの駐車場としました。この三輪会館の改築によって区内の団体活動は一段と活発になりました。

設計は西尾建築設計事務所に依頼、施工は母倉工務店に決まりました。敷地は三百七十七平方尺、木造二階建てのべ約三百四十三平方尺で、重要な部分に軽量型鋼が使われました。総工費千二百万円円で旧公会堂と消防器具庫の全面改築を行い、四十年十二月に「三輪会館」として発足しました。

一階はステージ付きの大会議室と事務室のほか、厨房室と四・五畳の管理室。二階は二十四畳の大広間と六畳の和室二室、道具入れなど。区民の利用については無料で、区外の人の利用は有料としました。二階大広間には神殿を設けて結婚式場も開けるようにし、開館当初はよく利用されましたが、昭和四十六年に市民会館に結婚式場が設けられたため、利用者も減り、この年に取りやめとなりました。このとき、神祠はじめ用具類は三輪神社へ寄贈しています。その後、一階の管理室を取り壊して厨房室を広げ、二階の道具入れを特別室にしています。

この会館の新築にともなって、三輪財産区の所有地の一部を処分して財源を確保しました。この会館には、様々な区有資料が保管されています。文書類では、明治から昭和にかけての書類が保存されています。陶磁器類では、▽明治四十四年の三輪公会堂新築のとき、九鬼隆一の意を受け芝虎山から贈られた高さ五十二寸の大三田青磁花瓶。この花瓶は三田青磁の逸品で保存に留意が必要とされています。▽呉須焼の御神酒すず一對、▽青磁窯の物原から出土した青磁の破片が三十数点。▽昭和四十年十二月の三輪会館新築祝いに山見理一、岩下三郎から寄贈された陶器の布袋像。▽菱電化成二十周年を記念して贈られた北出不二雄作の「牡丹瑠璃鳥大皿」。不二雄の父は三輪大道坂で生まれ、後九谷で作陶に従事した九谷の名工です。不二雄は金沢美術工芸大学陶磁器科を卒業、日展に入選し、総理大臣賞などを受



水害時に活躍した小舟を報じる神戸新聞

け後、母校の大学で教授を勤めた人。

書画類では、二階大広間に掲げてある九鬼隆一（成海）から贈られた扁額。

▽油絵は山岳遠景など三点があります。静物画は泉常次郎、小西佃、河脇幸次郎からの寄贈、三田青磁の油絵は青木大乗の娘の作品。▽虎の日本画は園田武夫の寄贈。三田ゴルフ場の水彩画は、有馬ゴルフ当時のコースで、木下正一が寄贈したものです。

今回の区史編集にともなうて、三輪会館で保存していた区有文書を市史編さん課に依頼して整理をしてもらいました。その結果、段ボール箱十八箱（二千二百七十三袋）に整理されてもどり、その後「三輪区有文書目録」も届きました。

**水難救助** 公会堂、器具庫の改築にともない、以前の器具庫の天井には檜材（ひのき）で作られた長さ約八尺、幅約一・五尺の川舟を移転 と操舟に使う竿（おし）一本が保管されていました。しかし新しい三輪会館が建てられたとき、消防器具庫が手狭にな

って保管するスペースがなくなつたため、この川舟は西本製材所に預けられました。この舟は明治時代に同消防団が購入、

おもに水難救助船として使用してきました。国鉄三田駅から縄手地区にかけての武庫川左岸は土地が低く、昔から水害多発地帯。武庫川の堤防も弱かつたため、大きな台風や集中豪雨があるたびに、再三、床上、床下浸水などの被害に見舞われていました。武庫川が決壊するたびに、若い団員たちが乗り込み、川のようにになった町中を動き回り、水難救助活動の外、連絡や炊き出しの運搬に大活躍しました。また、水害のときだけでなく、「池に子供が落ちた、おぼれている」という通報で、大八車に舟を積んで運んだこともありました。明治から昭和三十年ごろまでは、たびたび出動していましたが、その後、武庫川の改修が徐々に進み、また周辺の排水路も整備されたことから、大きな水害もなくなり、同時に舟も区民の目に触れることも少なくなっていました。この川舟は平成五年の連続放火による火災で焼失してしまいました。

## 武庫川改修

武庫川改修工事は四十六年に着工、神戸市北区道場町の有馬川との合流点から三田広野大橋まで、全長約十二・五キロの区間で、当時の川幅を三十五メートルから六十メートルに拡幅、川底も二、三メートル掘り下げる大工事でした。工事は下流から進められましたが、相生橋付近から三田大橋までの市街地約七百メートル間は、改修工事中最大の難関。三十八メートル計画通り五十三・七メートルに拡幅、川底を三メートル掘り下げると、毎秒四百立方メートルの最大流量が計画最大流量九百立方メートルとなり、市街地を洪水の危険から守れるようになります。これに伴い左岸の四、五十戸が立ち退くことになりました。

北摂ニュータウン計画にともなうて、昭和四十六年度に三輪字城山の丘陵地に本格的な運動公園の建設計画がもちあがりました。国庫補助の事業認可を得て、体育館をはじめ、野球場やテニスコートを作って市民のスポーツセンターにしようというものです。敷地十二・三畝のうち九畝は国有地の払い下げを受け、残りの民有地は市が買い上げました。

城山公園  
当時、市は赤字財政で造成工事費の捻出に困っていました。造成工事は地元の業者との間で問題もあつたよ  
を造成 うですが、当時の赤尾茂市長の決断で四十六年から自衛隊伊丹駐屯第三師団の施設大隊によって、素造成が進

められました。造成工事は年間三カ月間の契約で、四十八年七月に同工事を終え、陸上競技場となる部分一畝を整地し、仮設運動場としてひとまずオープンしました。

このあと五十三年七月に野球場、同十月に陸上競技場、五十四年にはテニスコート、五十六年には体育館が次々と竣工。平成六年には野球場のナイター照明もでき、この間、建設の総事業費は約十七億円にのぼっています。

体育館のアリーナは千五百平方メートルで、バレーボール三面、バスケットボール二面、バドミントン十面、卓球台二十四台の設備があり、トレーニング室や更衣室、シャワー室もあります。野球場は一万三千平方メートル、両翼九十一メートル、センター百十メートル。陸上競技場は四百メートルトラック八コース、ゲートボール十六面がとれます。

三田青磁窯跡  
三輪神社裏山の東斜面の中腹に、三田青磁を作った明神窯跡があります。四十七年から二カ年計画で発掘  
の発掘調査 調査が行われ、三基の連房式登り窯と素焼き窯が発見されました。一号窯は焼成室四房からなる窯で全長

十八メートル、最大幅五・五メートルで、焚き口部から煙り出し部までよく残っており、明神窯の中でも最も大きなもので、江戸時代か



埋め戻された三田青磁窯跡

ら昭和の初期に窯の煙が消えるまで使用されていました。

発掘調査のあとは現状保存のため埋め戻されました。窯跡は昭和四十九年三月、県の文化財に指定されています。

三輪区の広 昭和四十九年八月に広報誌「みわのさと」の第一号が発行されました。報紙を発行した。当時、市内の区や地区単位のコミュニティ機関誌としては初めての試みでした。

三輪区は昭和元年当時の戸数は百七十三戸、人口は八百四十六人でしたが、戦中の疎開や戦後の都市化の進展によって、年々転入者が増え始めました。このころ五百四十三世帯、千九百六十人となり、市内で一番大きな行政区になっていました。約五十年間に世帯数が三倍になり、人口も二・三倍に増えたことから、新しく区民になった人にも地域のことをもつと理解してもらおう。また、区民内の組織の活性化と区民の連帯を深めようと、広報誌の発行に踏み切ったものです。

「みわのさと」第一号は、B5判、十二頁。表紙には三輪区のシンボルでもある三輪神社の写真を大きくあつかっています。各団体の役員、区予算、財産区の説明などの他、老人クラブ、婦人会、青年団、子供会の代表が近況を報告しています。約六百部印刷、区入りしている各戸に無料配布しています。

初代の編集長は当時区長をしていた井殿清、二代目は三田市役所観光課長を退職後、三輪会館の事務局長を勤めた前中平示、三代目は和田延男で、平成七年から「みわのさと」編集委員によって編集されています。平成十年四月現在の区入り世帯数は約六百二十世帯、発行部数は八百部で、区入りの各家庭、事業所、市等官公庁、近隣区などに配布しています。最近では年間三回発行し、通算四十四号になっています。



**決勝で見事逆転**  
三輪ジュニアが優勝  
地区選抜大会  
三輪ジュニアが優勝  
地区選抜大会

優勝を喜ぶファイターズの選手（神戸新聞）

老人クラブ 三輪老人クラブは四十六年五月の三輪区主催の敬老会に創立総会を開いて発足しました。「三輪老人クラブ五年歩み」によると、これより前、三輪区には老人の集まりである「福寿会」がありましたが、このころ、市老人クラブから三輪区に老人クラブ設立の奨めもあり、有志が集まって設立の準備にかかりました。四十六年二月に初会合、

三月に発起人会を開き、会則、事業計画等を立案。地域社会で老人自らが福祉を高め、その活動によって家庭の福祉、社会の福祉をすすめるのに役立てようと発足しました。老人クラブの設立にともない「福寿会」は発展的に解散しました。

初年度の主な事業は、寝たきり老人の慰問、盆栽の作り方研修会、浪曲を聴く会、囲碁会、クラブ運営研究会などの開催、永沢寺で法話を聞いたりしました。四十七年度の総会は加東郡杜町の夢園温泉で八十八名が参加。三輪公園除草奉仕、来迎寺で物故会員の慰霊祭開催、菊花展開催など。初代会長は梶兼吉、二代会長は井殿恒三郎でした。五十年六月、三輪会館で

太期又夫公民館長を迎えて五周年記念大会を開き、「三輪老人クラブ五年の歩み」を発行しています。

三輪ファイター 三輪ジュニアファイターズは四十九年八月に開かれた県少年ズの隆盛時代 野球大会の三田地区選抜大会（三田軟式野球協会主催、市教

委、神戸新聞社後援）で優勝しました。第五回の大会で市内四ブロックの各代表の三田小、小野松風子供会、広野ホワイトが出場、兵庫中央病院グラウンドで熱戦を展開し、決勝戦で三輪が広野を12対10で下し、逆転優勝しました。三田市の代表として九月に竜野市で開かれた県大会に出場、小野市の代表と対戦しました。選手たちは三輪区内の小学生を中心に構成され、区内で自営業を営む別所茂監督の指導のもと、めきめきと上達し、栄冠を手に入れました。

五十年年度の県選抜少年野球三田予選大会は、八月に三菱電機グラウンドで行われ、昨年に続いて三輪チームが優勝しました。市内の七校区から一チームず



三田駅から市役所へ向かうD51 (神戸新聞)

## デゴイチ 県道を行く

### 三田で暁の大輸送作戦

つ参加し、準決勝の広野―三輪戦では広野を9対2の六回コールドで圧倒しました。決勝戦で三輪は五回に大量6点を奪うなど毎回得点で結局13対6の五回コールドで栄冠を獲得しました。

五十一年度は城山スポーツセンターグラウンドで開幕。一回戦は小野の松風を11対0で圧倒。準決勝の本庄戦では、四回表まで6対4と苦戦、その裏に一挙に6点をあげて決勝へ進みました。翌日の決勝戦では広野と対戦。延長戦に入る接戦でしたが、1点差で惨敗しました。この年に氷上郡柏原町、丹波文化会館グラウンドで開かれた第三回丹有地区招待少年野球大会(氷上郡柏原町軟式野球協会主催)で、三輪ファイターズが優勝しました。丹有地区の児童の交流と野球の振興をねらって年一回開いているもので、三田市と、多紀郡から一チームずつ、氷上郡から二チームが参加して開かれました。三輪ファイターズは一回戦で黒井(氷上)と対戦、9対1で圧勝、決勝戦でも山中(多紀)を3対1で下し、快勝しました。

蒸気機関車が「ちびっ子たちの生きた教材に」と国鉄OBたちの願いが叶い、市役所広場に 大阪鉄道管理局から蒸気機関車のD51が無償で貸与されること

になり、区内の市役所横駐車場にデゴイチが展示されました。

このデゴイチは、昭和十一年に神戸市の川崎車両でつくられた炭水車付機関車。長さ二十尺、横三尺、高さ四尺、重さ百二十ト、牽引力の強さでは最大級の機関車で、おもに貨物用として翌十二年からデビュー。戦時中は長野県などの山岳地帯で活躍し、二十四年から東海道線を走りました。三十三年十一月から福知山線に姿を見せ、沿線住民から親しまれましたが、四十五年四月に第一戦を退き翌年の一月に正式に引退しました。三十三年間にわたる走行距離は百七十六万七千五百九十。で、地球を四十四周しています。煙突部分がカバーで覆われたナメクジ型と呼ばれる、初期の珍しい形式です。

デゴイチは五十一年三月二十七日午前四時、吹田操車場発の和田山行き貨物

列車に牽引されて出発。東海道線と福知山線を経由し、六時前に三田駅二番ホームに到着しました。炭水車と機関車の部分を切り離して清掃し、整備をしました。

翌月四日大型トレーラーへの積み込み作業が行われました。百トクレーン二基が、まず炭水車（重さ十八ト）、次いで六十八トもあるデゴイチをゆつくりと吊り上げました。真夜中に百人の鉄道ファンや近所の人たちが見守るなか、三田駅から市役所まで約二百数十ト間の運搬が始まりました。道路には水道管や下水管があるため、厚さ二・五ミリの鉄板六十枚を敷いて補強した上、縄手区を経て三輪区の市役所までを運行。さっそく再び百トクレーンでゆつくりと展示場のレールの上を下ろされ、全作業を終えました。

五十一年七月、国鉄から三田市に正式にデゴイチが引き渡されました。引き渡し式当日には、大阪鉄道管理局の佐藤長武・機関車課長から岡崎元次市長に、朱色の地に金色の文字が浮かぶ「D51・25」のナンバープレートが手渡されました。次いで国鉄OBの機関手たちによって石炭で釜がたかれ、煙突からもくもくと煙があがり、動輪横の蒸気排出口からは勢いよく蒸気が吐き出され、汽笛も鳴りました。この輸送費用は、三田ロータリークラブが設立十五周年記念事業として、三田市に二百万円を寄贈、市も三百万円の補正予算を組んで実現しました。

しかし、六十三年二月、市の人口増に伴って市役所の来庁者が急増。約百台を収容できる市営駐車場は満車状態のときが多く、利用者から駐車スペースの拡大を求める声が出ていました。そこで市は「D51をウッディタウンの公園内に展示し、より多くの人に觀賞してもらおう」と移転しました。

#### 川や池の整備

五十二年、三輪区内の池がかりの農地に水を送っていた徳間池が埋め立てられて、城山公園の駐車場になりました。市から「同センターの駐車場が狭くなり、池を埋め立てて駐車場にしたい」と三輪区農会に払い下げ同意の要請がありました。これは城山公園で大きな催しが開かれたときに利用者から「もっと広い駐車場を」という要望が強く出てきたため、スポーツセンターの南にある同池に白羽の矢が立ったのです。

農会では先祖が守り、改修してきた池で、三輪区としても防火用水の池でもあると、難色を示していましたが、農地も減



下池の改修工事

少してきたこともあって水利権者が同意、市の建設工事が進められました。このとき西谷川に沿った歩道も整備されました。

また、徳間池の奥にある池は徳間池の代償工事として余水排と樋門のサイホン工事の改修をしています。東谷川もこの年に一部改良工事をしています。

西谷川は城山スポーツセンター下の大池から民家の間を縫うように流れ、三菱電機から市役所の北を流れて二又の下に出て武庫川へ注ぐ比較的短い川です。天井川で土手が高かったのですが、三菱の進出に伴って水路を変更。五十五年七月に樋門を改修しています。昔は流れてきた水で田を養ったり、洗濯もしました。

このほか、下池が危険ため池の指定を受け、自治振興事業として総事業費五百万円で改修しました。工費のうち七割が補助金、残り三割の百五十万円は地元が負担しました。また、人取池とわくべ池は、濁水期用として三田ゴルフ場に水を貸しています。

高度成長期から、年々人家が増加し、生活環境も変化して、農業用水に汚水が流入するなどの問題も起きました。工場誘致以後、農地の転用も次第に増え、江戸時代には九百石を産した田地もその後次第に減少し、戦前には約四十町歩もありましたが、現在では三町歩になっています。

**崖崩れ多発の上野に擁壁** 五十六年五月、急傾斜崩壊危険区域に指定されていた上野地区に、崖崩れを防止するコンクリート擁壁が完成しました。

この場所は県道三田〜後川線沿いの急勾配の斜面に位置しています。民家、商店など十数戸が斜面の上部や麓に点在していますが、毎年梅雨期など大雨が降ると、小規模な土砂崩れが発生していました。五十三年六月の大雨のため、住宅の地盤が崩れる事故が起きました。このため翌年三月、同地区一帯の七千



がけ崩れした上野の急斜面

三、四年かかりました。

藤の台は松が丘小学校区に

友が丘などの住宅開発等に伴い、六十一年度に三輪小学校の児童数は九百七十八人となり、市内一のマンモス校に膨れ上がりました。このため、翌年四月、川除と友が丘の間の丘陵地に市内十一番目の小学校として松が丘小学校が開校しました。この校区の変更で、区内の藤の台住宅（二十四組）が松が丘校区になりました。

ゲートボール場完成

六十一年四月、三輪老人クラブ専用のゲートボール場が完成し、婦人会員らと交流の記念試合をしてオープンを祝いました。このコート用地は民間企業の所有地ですが、「地元の人たちに有効に使用してもらえれば」と好意的に無償で借ることができました。整地には一部重機を導入しましたが、老人会員らが一カ月半の労力奉仕で手作業で整地して立派なコートに仕上げました。地元にはこれまで、三輪神社境内にゲートボール練習場がありましたが、規格よ

六百平方メートルは国から「急斜面崩壊危険区域」に指定されました。

五十五年九月、市、県が防災対策に着手。約一割の受益者負担については地元住民からの合意も得られ、擁壁工事が始まりました。工費は約三千五百五十万円、工事中の崖崩れを防ぐため、土止めのH型杭を打ち込みながらの難工事、総延長九十二メートルの擁壁が完成しました。擁壁は地下二メートル、地上二メートルの高さがあり、さらにその上部には落石防止の鉄製の柵が設けられています。

住居表示の変更

五十九年二月一日から三輪地区等の市街地で新住居表示がスタートしました。「すっきりした、親しみのもてる町名に」という市民の強い要望で実施されました。区長会、学識経験者による住居表示審議会を設け、二年がかりで住民の意見をまとめながら新町名を検討。三田地区は旧二十六もあつた通称名を十三町に、三輪地区は従来通り九町にまとめました。三輪区の表示では三輪一〜四丁目と中央町に分かれるため、紛糾し定着するまでに



決壊寸前の武庫川堤防を報じる神戸新聞

り狭いため、公式試合ができなかっただけに新しいコートは待望の施設となりました。

コート開きでは区長をはじめ、老人クラブや婦人会員、三輪財産区の議員ら関係者六十人が出席。始球式として、杉内会長がスティックボールを打ちました。続いてお年寄りが婦人会員らにゲートボールの楽しさを知ってもらおうと、勝ち負けにこだわらない記念競技をしました。同クラブではコートを地名から「茶碗山コート」と名付けられました。

**あわや武庫川決壊** 昭和五十八年九月二十六日から二十八日にかけて三田地方は二百二十<sup>リ</sup>の大雨に見舞われ、三輪区低地域も床上浸水しました。三田市では災害対策本部を設け、三輪区内の一部の人は小学校へ避難しました。

また、六十一年七月二十一日、三田から丹波を襲った集中豪雨で武庫川が増水し、三輪の市役所裏の堤防が決壊寸前となりました。このときの豪雨で市内で床上浸水八戸、床下浸水二十七戸、道路損壊四箇所、堤防崩壊八箇所、農地冠水十五戸の被害がありました。

危険箇所となったのは、三田大橋上流約百<sup>リ</sup>の左岸。河川改修工事でコンクリート護岸をした新堤防と、未改修だった旧堤防との継ぎ目のところだ。午前十時前、濁流に洗われた堤防の内側が二、三<sup>リ</sup>にわたって崩れ落ちたのを皮切りに、アツという間に堤防の一部が削り取られました。十時半には川床部を固めていた重さ五<sup>ト</sup>のコンクリートブロックが、地響きをたてて流失しました。正午前後には幅約八十<sup>リ</sup>にわたって濁流に洗われ、堤防上に設けられたアスファルトのジョギングコースも流失。残る堤防はわずか二、三<sup>リ</sup>の厚さしかなくなり、堤防の決壊は時間の問題となりました。

市水防本部では、広報車を出して市民に注意を呼びかけ



ほぼ完成した南部土地改良事業（左側は武庫川、右側は西谷川）

る一方、市役所の職員二百人や消防団員百人を動員。土囊<sup>どのおう</sup>作りと堤防の外側からの補強工事に着手。県土木部では、クレーン車とダンブカー、ブルドーザーを動員して五ノブロックや砕石を崩壊部分に投入して、懸命の応急工事に当たり、午後から水位が下がったこともあって紙一重の状態<sup>じいつゆう</sup>で決壊を食い止めました。

同本部の調べでは武庫川の水位の最高は午前十一時の三・八四呎。過去の最高水位は五十八年九月の五・一二呎で、四日前後の水位は梅雨や台風の集中豪雨で年数回は記録しています。ところが崩壊部分となった新旧堤防の継ぎ目では、川幅が旧河川の三十呎から一気に五十五呎に広がる上、河床も三呎下がるため水流が渦をまいて加速。ブロックや石カゴで継ぎ目を補強していましたが、激しい流水に堪えられなかったようです。

さっそく復旧工事が始まり、県北拱整備局土木部では、十ノダンブカー三十台を動員して、一日八往復して計二千四百ポンドの土砂やブロックを投入しました。川水も減水したので、濁流でえぐり取られた部分を削り取り、流れにくい粗い砕石などを入れて河川敷にブルドーザーなどの重機の足場を確保しました。さらに足場周辺を五ノブロックで固め、やっと元通り堤防を再構築しました。今回危険になったのは、終戦直後の決壊箇所から約五百ポンド下流のところでした。

**上下水道** 公共下水道事業は市街地における浸水災害の防止、生活環境の改善、公共水域の水質の整備 保全などを図るなど都市生活に欠くことができないものです。三田市内の下水道整備

は昭和五十八年から始まり、三輪区内で工事に着手したのは平成元年になってからでした。最初に行われたのは、三輪郵便局から三輪神社鳥居前の国道までのいわゆる三輪本通りでした。続いて三年度には市役所前から三田駅へ向かう市道周辺。四年度にはサテイ、日本ケーブルシステム付近。十年度は三輪交差点から三輪食堂付近と次々と整備されています。

一方、立ち後れていた上野地区の上水道は、五十九年度から三カ年計画で進められ、六十一年六月から給水が開始された。この結果、区内の二十二組、二十三組と三田ゴルフ場に上水道が給水されました。これは市街地に給水が開始された昭和十六年から四十五年も経っており、高台で水不足に悩まされていた区民にとって喜びもひとしおでした。

**南部土地改良** 三輪南部土地改良事業共同施行体（代表藪内茂、地権者十四人）では、六十三年五月に、市役所北部の武庫川左岸の現地で圃場整備（面積一・五<sup>ハ</sup>）の起工式を行いました。

この付近には、農地のほか県有地や国鉄時代の蒸気機関車の給水溜池や、財産区の土地が十坪（三十三平方<sup>ハ</sup>）ほどあったところです。低地で芦が密生し、洪水のときには毎回浸水し、稲作に支障を来すなど農地耕作地として、条件が良いところはいえませんでした。武庫川や西谷川の河川改修の改良にあわせて、補助金を受けずに、地権者たちの自力で整地して区画整理をし、県有地に公園を設けるなど周辺を整備しました。同年十一月三十日に完工しています。最近、公共用地の代替えて数件の家が建ち、まわりには駐車場も整備されてきています。

## 2 三輪神社と来迎寺

**社務所・公** 五十三年から翌年にかけて正遷宮の準備として、境内広場の雨水止め壁、排水側溝の改良、集排水管の新設

**園の整備** 工事が行なわれました。工費は二十七万円。また法面（斜面の部分）の一部が危険な状態になってきたので、危険箇所（石積み）の石積み工を行いました。このとき秋祭りで宮入をする境内を南側へ幅一・五<sup>ハ</sup>ほど広げました。工費千八百四十万円、このうち公園整備部分については財産区から補助を受けました。このときご神木の杉を補植しています。

五十四年三月に社務所及び勤番所（神職住宅）の改築に着手しました。五月九日に神社関係役員等が集まって古式豊かに社務所の上棟式を行い、同年十二月に引渡しを受けています。旧社務所は文化十二年（一八一五）の建物といわれ、山門は勢住寺当時の建物でした。老朽化が激しくなったため、一部改修して保存することも検討されましたが、専門家の意見も聞



旧社務所を取り壊しさら地に



旧社務所

いた上で、昭和五十三年に取り壊され、正遷宮を期に全面改築しました。工事費は約三千三百万円でした。

また、このとき三月から十二月にかけて幣殿及び拝殿修復工事と小宮殿六社、手洗いの新築と玉垣等の修繕工事が行われました。玉垣は岡山産の白御影石（みかげいし）を使用しました。また、神社正面石段下の庚申堂も改築されました。

ふとん太 五十四年、ふとん太鼓の台車を新調しました。祭りの巡行は神社と車瀬橋鼓の修理 までの間を往復していましたが、その後、地家まで延長したのを契機に、太鼓の下に取り外しができる台車を入れて曳けるようにしました。

またこの太鼓は、幕末からまったく形態は変わっていませんでしたが、五十八年にできただけ多くの区民で太鼓が担げるよう縦棒をこれまでの四・二五寸から六・二五寸に延ばしました。台車の取り付けも縦棒の延長も、かき手の肩の力が弱くなってきたため、その対策を講じたものです。

また太鼓は祭りの巡行の際、激しい動きをすることもあり、よく傷みました。その都度、区の役員や婦人会員によって幕のほつれや金具とめなど応急修理をしています。また、フトン部分は竹を編んだ上にラシヤの布を張り付けたものですが、現在はベニヤ板の上に張り付けたものに作り替えています。太鼓の取蔵庫は地家と町の二棟ありましたが、昭和四十九年頃、地家と町とを合わせて一棟として新築されました。

しめ飾り結び民 三輪神社に伝わる民俗芸能「轍差し」の「しめかざり結び」が、吹田俗博で永久保存 市の国立民俗学博物館で、永久展示されることになりました。同博物

館関係者が三輪のしめ飾り結びの写真を見て「民俗学的に価値がある」として、五十三

国立民族学博物館へ

水久展示、四月に公開



しめ飾り結び民博で保存  
(神戸新聞)

年十一月に同神社に出展を要請。これを受けて三輪区では「先祖から継承されてきた伝統のしめ飾り結びが、地元だけでなく、より多くの人たちにも見てもらえるのは何より」と、全面協力することにし、太鼓とともにしめ飾り結びを寄贈することになりました。区の役員たちは長さ約七呎、直径二十センチほどの竹を用意し、ワラを燃やして油ぬきをして、半年あまり乾燥させました。

鐘などを、稲ワラで作った縄で太竿に取り付ける結び方のことをいいます。太太鼓をくくるワラ縄の長さは約十呎、とくに太鼓上部の飾りは直径が三十センチ近くもあり、行事の勇壮さを象徴しています。これは単に太鼓を結びつけるだけでなく、そのユニークな結び方は大太鼓の飾りにもなっています。太さ十センチ以上のしめ飾り結びは、ほかの轆差しとは大きく異なった独特のもので、全国的にも極めて珍しいものだといわれています。

五十四年一月にトラックで万国博覧会跡地にある同博物館へ送られました。同館では稲ワラに虫が付かないようにさっそく薰蒸したあと、翌年四月「日本のまつりと伝統展」で展示。その後、三輪のしめ飾り結びは、永久保存されています。

五十五年 正遷宮祭の計画及び神事は神社側が担当し、協賛行事の一切は各区によって取り仕切ることになっています。  
 の正遷宮 五十五年の正遷宮は四月十一日から十三日の三日間、三輪神社を中心に氏子総出で賑わいました。準備段階では、前年の初夏に町内の辻々に日程を表示した立て札が建てられ、正遷宮ムードを盛り上げました。行事の経費については同神社氏子の各区で次の目標のもと、三回の分納で募金が進められました。

- |     |          |       |     |        |       |
|-----|----------|-------|-----|--------|-------|
| 三輪区 | 三千三百五十万円 | (六七%) | 一番区 | 五百万円   | (一〇%) |
| 二番区 | 五百万円     | (一〇%) | 縄手区 | 四百五十万円 | (九%)  |

成谷区 二百万円 (四%)

三年前から三輪神社正遷宮実行委員会(杉内義夫会長)を結成、一般からの寄付金約八千万円を集め、神社本殿を改修、社務所を新築。地域の子供たちのかつぐ「子供みこし」二基も完成しました。

これまで子供たちにとって祭りの行事は男児が中心で、女兒はただ見物するだけでした。五十四年に子供御輿こどもみこしが作られたのを契機に、翌五十五年の正遷宮に区で、男児と女兒の子供御輿が二基造られ、女兒も祭りに参加するようになりました。この御輿は、金具本金彫金本箔仕上げ、屋根は四方唐破風造り、四方扉、四方鳥居、玉垣、鳳一羽、小鳥四羽、鈴飾り縄四方という本格的なもので、このとき子供用のハッピ六十着と大人用十着を新調しました。

正遷宮は、屋根をふき替えてすっかり装いも新たになった本殿で、四月十二日に開幕し、午前十時半から記念式典が厳かに行われました。小田文雄宮司や氏子代表、塔下真次市長、関山勇夫市議会議長、井元文治県会議員、西川勉県北摂整備局長ら関係者約二百人が参列して、三輪神社並びに氏子の発展を祈りました。

午前十一時には新町の車瀬橋から「子供みこし」二台と「砂持ち行列」が発発。男の子はそろいのハッピ、女の子は晴れ着に花笠はなかさをかぶり、いずれも、一握りの砂を入れた花カゴを両端につるした砂持ち棒を肩にかつき、しずしずと神社へ。約四百五十人の子供たちは晴れ着姿の母親やカメラ片手の父親に付き添われて、約一・五キロを練り歩きました。

午後からは約三百人の区民が正遷宮用の新調の浴衣を着て、威勢よく「祝い餅」を奉納しました。区内を松・竹・梅・桃・桜・杉の六ブロックに分け、餅二斗を乗せた六台の祝い餅が、織差し音頭に合わせ、車瀬橋から神社まで練り歩き、沿道を埋めた見物客の拍手を浴びていました。

十二日には三田市の民俗芸能「織差し」が奉納されました。



正遷宮の稚児行列



くとうみの祭典で幟差しを披露

午後一時半過ぎ新町の車瀬橋前に川除、高次、桑原東、桑原西、山田、下田中、大原の七地区から幟七本が集まりました。一地区約五十人のグループが、そろいのユカタ、ねじり鉢巻き姿で笛、太鼓を叩き、氣勢を上げると、地区代表の青年が十尺を越す青竹につけた長さ約七尺の赤、青、白の三色の幟を軽々と差し上げます。重さ約三十<sup>キログラム</sup>もある七本の幟は、子供たちの持つ小さな幟を先頭に三輪神社までの約一・五<sup>キロメートル</sup>の道を練り歩き、沿道をぎっしり埋めた家族連れなどの拍手を浴びました。

十三日の最終日は、午前九時半から三田天満神社の氏子による「幟差し」。同十一時から「式包丁、演武」。午後一時からは神社境内に特設舞台を設置して、素人ニワカ、寸劇、歌謡曲、民謡、踊り、落語、漫才、奇術などを披露しました。このとき正遷宮記念のカラー写真集五百部作成し、全戸に配布しました。

各地のイベ 五十年八月九日に芦屋浜で開かれた「二十一世紀ひょうご創造協  
ントへ参加 会」の「ふるさとづくり夏祭り」に三輪の幟差しが出場しました。

三田市郷土芸能協会の推薦を受け、市内を代表しての参加とあって、幟差しの青壮年たち約三十人は八月一日から毎晩三〜四時間、練習を重ね、本番に備えました。九日午後三時から三田市役所前で壮行会があり、岡崎市長の激励のことばを受け、市のマイクロボス二台に分乗して芦屋へ向かいました。

この催しは県内のふるさと文化を掘り起こし、県民の交流を図ろうというもので、中国自動車道沿線でスタートさせる「緑の回廊計画」の前年祭として催されたものです。県下から温泉町の「傘踊り」、篠山町の「でかんしよ節踊り」、神戸市の「有馬太鼓」のほか、県下の主な盆踊りの競演や、伝承文化が披露されました。イベントの司会は夢路いとし、喜味こいしで、徳島からは「阿波踊り」、沖縄から「沖縄踊り」も参加。夜店、物産展や打ち上げ花火もあり、賑わいました。

三輪の轆差しが出場したのは午後六時三十分頃。赤、白、黄、水、紫の五色の轆三本が芦屋の浜風にはためき、見事な演技に観衆からひとときわ高い拍手を受けました。

このほか主な出場イベントをあげると、六十年五月二十五日に淡路島・津名町のおのころアイランドで開かれた「くじょうの祭典」には轆差し。六十一年十一月の「さんだ複線電化フェア」に協賛して三輪区から地家と町のふとん太鼓二基を出しました。このときは三田始まって以来という十七台のだんじりが参加。サンバや仮装行列など約二千人の記念パレードが駅前通りを練り歩きました。

また、六十三年八月七日にフラワータウン深田公園で開催された「ホロンビア88」の「三田市の日」に、三輪地区から三輪、川除、大原の轆差しが出場。五反轆三本、三反轆七本の計十本が納められました。このとき、皇太子妃の美智子さまもご覧になりました。博覧会は四月十七日から八月三十一日までの期間中に入場者は百六万六千三百八十八人にのぼり、これを契機にニュータウンの住宅入居が増え始めました。

また、平成二年八月五日 三田ゴルフ場の開場六十周年記念式にクラブの広庭で、名峰有馬富士をバックに緑の芝生に五色の轆を奉納しました。この行事の参加者は九十人。農会が餅御輿のほか、神楽保存会、消防団、婦人会、青年団も協力しました。このほか、「三田まつり」にも数回、轆差しと神楽が出演しています。

また三輪神楽は五十一年十一月十四日、奈良県桜井市の大神神社の「酒祭りの日」に奉納しました。一行二十八名は三田からマイクロバスで同神社へ直行し、まず神楽殿の神前で舞った後、同神社醸造安全祈願祭に参列していた全国酒造家の直来会場で神賑の演舞を披露。また七・五・三参りで賑わう親子連れにも再び神楽殿で神楽を舞いました。三輪神社の神楽には「荒神払い」、「剣の舞」、「神来舞」など七番があり、なかでも天狗とおかめ、ひょっとこが踊る「天狗獅子」のユーモラスな舞に、笑いを誘い、大きな拍手をあげました。

三輪神楽はこのほか、北摂三田ニュータウンの起工式、熱田神宮、白山姫神社でも奉納、三田市民会館落成式の時にも、市役所前広場で市民に披露しています。



石段の改修工事

石段の天場は、雨天の時にもすべらないように仕上げられており、階段の両側には老人や足の弱い方も参拝しやすいように、ステンレスパイプの手すり(延長二十八 $\text{m}$ )が取付けられています。途中、下から二十五段目のところで、東側の中段に通じる箇所へ通れるようにこの部分は開いています。また、この両側の手すりには初詣や七五三詣、祭礼があるときに三十六箇所、幟が立てられるようになっています。

付帯工事として灯籠の解体及び復元、石段上部にある銅巻き鳥居を取り外し、修復も行われました。この鳥居の西側の柱の銅板表面には「寛政十二年(一八〇〇)八月吉祥日」、東側の柱には「氏子中 田中理兵衛、新兵衛、銅工 播磨屋音羽」と線刻してあります。重機で吊り上げて取り外したところ、中の木柱は腐食が進んでいて危険な状態になっていました。当時、氏子総代の一人であった福西一が慎重に銅のビョウを外したところ、西側の木柱に「明治〇〇年七月、大般若(世)話

石段・銅巻鳥居 三輪神社正面の石段は、五十五年頃から石材の一部が傾斜するなどの、傷みが激しくなってきました。このため、六十一年七月に「石段新設工事・鳥居仮移転・工事安全祈願祭」が行われ、約二カ月がかりで全面改修工事が行われました。

八月から既設石段の取除き工事が行われました。このとき旧石段下の向かって左側の石柱は、風化が進んでいましたが、「奉 寄進 神田焼物中 文政九年(一八二六)丙戌九月吉日」と、三田青磁に関連する文字が刻まれましたので、庚申堂の左上方台地で保存することにしました。

九月から新しい石段組みの工事に着工。使用した石材は岡山県産の矢掛石で、一段分の規格は高さ十六 $\text{cm}$ 、幅三十六 $\text{cm}$ 、長さ二・九 $\text{m}$ 。全部で四十一段あり、下から上の境内までの標高差は六・八 $\text{m}$ 、直線距離にすると長さ十二・一 $\text{m}$ あります。



銅巻鳥居の修理

となりました。三輪神社の秋祭りが中止されたのは昭和二十年の大洪水以来四十四年ぶりのことでした。

**本堂・庫裏の改修** 昭和三十五年四月に來迎寺十一世・元宣の晋山結制が行われました。これに合わせて関係者の奉仕で県道より寺の下まで、道路を拡幅、完全舗装しました。この道はその後、市道に編入されました。また、四十三年には

関係者の寄付金によって墓道の改修が行われました。拡幅舗装をするともに、水道を敷設しました。里道の改修であることから三輪財産区より補助を受けています。

五十三年頃から本堂と庫裏の改築の話が持ち上がりました。五十六年一月に「來迎寺再建を考える会」が発足。五十六年五月に臨時檀徒総会を開いて、再建については「建築委員会」に一任しました。建築委員長に常深正作、副委員長に井殿清ら三十三名の建築委員を選出、五十六年十二月に第一回集金を始め、寄付金も順調に集まりました。五十七年四月に入札を

方ヨリ氏子へ、大工、岡本藤吉、世話人 姫本市兵衛、井殿常右衛門、脇内治作」。東側の木柱には「井殿治市衛門、宮崎伊右衛門、炭屋栄助、〇〇重左衛門、森本〇〇、石本〇〇、石井〇〇」の墨書がありました。下部は木柱の腐敗が激しく判読できませんでした。

石段の工事は約二十日間で仕上げられ、付帯工事も含めて九月末までに総て完成しました。改築竣工祭は、この年の秋祭りを前にして十月五日に関係者五十人が集まって行われました。工費は、既設石段の撤去など基礎工費が百七十一万円、石材料費が三百七十三万円、銅巻鳥居、灯籠、參道敷石、両側水走石の撤去、修復など付帯工費が四十五万円。その他、職受け金具の設置などの追加工事もあり、合計五百九十八万円でした。

昭和六十四年一月、昭和天皇の崩御に伴い、平成元年の秋祭りは自粛して中止

しく本堂を改築したときに建立。裏面に「昭和六十三年春彼岸建立」と記してあります。花崗岩で高さ一・五丈、幅三十一丈、奥行き十八丈。



来迎寺の棟上げ式

行い、堂本製材所が落札し、八月に旧本堂・庫裡を解体しました。

五十七年十月に上棟式、柱、銘板上げをしました。全員で音頭に合わせ、棟梁の柱をたたく音とともにロープで引つ張るなど伝統に基づく上棟式でした。五十八年七月に受け渡し完了。約十一カ月後に本堂、庫裡に位牌堂を合わせ、建築面積百二十五坪（四百十二・五平方丈）が完成しました。追加工事変更などで予定より費用は増えましたが、支出総額は約一億二千九百五十万円。内訳は建築費一億八百万円、設計監督費百六十万円、仏具千八百八十万円、祭典費六百七十万円、その他百十万円となっています。これらは檀徒の浄財によって賄われました。

五十九年四月に僧侶二十五名、来賓、檀信徒二百名が参列して落慶法要並びに結制が盛大に行われました。山門下の石塔の字は曹洞宗前管長、泰慧昭の筆によるものです。

三輪三丁目の異道脇に「右 来迎寺へ」の石碑が立っています。六十三年に新